

こと、信行に別れの條、この國に叔父を尋ねて龍興に出遇ひ、館へ入り込みしより今日本望を遂げたること、順を追うて考ふれば、哀しくもあり、嬉しくもあり、吾ながら恐ろしきこともあるなり。現世今一度信行に遇ひて、最期の暇乞ひしたきは及ばぬ欲と捨てつ、未來八彌に遇うて譽られたきと思へば、明日をも待たず消えて行きたし。

やがては死ぬる身と知れど、この世にある中はこの世の人、莫忘想ならぬは凡人の常なるに、まして脊に負ひたる大石一時に下したれば、男優りの心の勝ちも以前の女に還り、思ふまじくと思ふぞ思ひの種、既往未來、幾度となく胸に往來する中に日は暮れぬ。

罪人としてか又は意志ありての業か、暗うなれども灯火持て來る人もなく、闇に坐りて闇を眺めど心は闇ならで、種々の事の顯然と見ゆるやうなり。思ひく我から疲れ、氣遠くなり近くなり、眠りたるにてもなく、さりとて起きたるにてもなく現の苦しきは死なぬ中に地獄へ落ちたるや。この責苦を救ふは佛の力、念佛の功德、それよと氣の附きて眼を堅く閉ぢ、南無阿彌陀佛

と稱ふれば、光明炫めき渡りて彌陀佛の御影、裏臉に宿り給ふかと覺えし。』突然に二葉と呼ぶ聲、一心彌陀佛を稱へたる唇を結びて眼を開くに、こは思ひも掛けぬ夫人、左手に手燭を持ちて立ち給ふ。障子明きたる音もせぬに、何時の間と驚かれ、あゝと思はず咽喉に叫びて、亂れたる居住ひを直す間に、夫人言葉もなく靜かに膝を突き給へば、其處へと置く手燭の灯火映りて、右の手に閃めくは正しく又光なり。

扱はと思ふ勝が瞬時の格期、先刻に夫人のこの身を乞ひ給ひしは、月頃膝元に遣ひしこの身とて、白晝の間太刀取の手に墮るゝを可憐に思し、その耻辱隠してやらんとの御心と、二つには今宵人知れず刺殺し、城中を騒がせし罪を正し給はんお情の計らひなりしか。到底死ぬ身なれば夫人の手に掛ること、太刀取の手に命落すより遙に優なれ、思ふ存分に刺殺されたらば、死際の義理も花こそ咲かめ。と白刃を眺みて恐れもせず、足を重ねて膝に力を籠め、合す掌未練なく、眼を閉ぢて仰向きさま、一と振り動かす頭に亂れ掛かる髪を拂ひ、白絹延べたらんやうなる首長々と咽喉佛を突き出し、是處をど云は

ん計りの格期、今のその間に懐劍灯火に炫めれば、哀れや越の雪に散らす龍田の嵐。
 夫人の膝は進みぬ、左手は勝が胸の透り。あはや閃めく刃光りは韓紅に染まらで、八重に掛かる細は落ちて塵に音をぞ残す。
 羽翼の俄かに緩みて襟の開くに、思はず眼を開く勝、白刃袖に拭ふ夫人の舉動合點行かずと凝視むれば、鞘へ納めて帯の間へさし込み、微笑とせらるゝ、眼尻の小皺に慈愛籠りて、口元に溢るゝ真情は、片瞬に誠實を止めぬ。

(其拾四)

呆るゝとは喜悅の極端、哀慟の果なるべし。突然に釣る糸の切れて、己が重味にがくりとなる芙蓉の花を、襟先抓む襦袢の捌きにふはりと塵て夫人上坐に直り、今は二葉ならぬ勝、呼び馴れぬ實名は容赦せかし。都にも鄙にも、今も昔も二人となき女子に、長き時間細絨の耻辱を與しは、我が身の縛めら

るゝより辛らけれど、心ありて長き宵を他處に過しぬ。張り詰めし氣に女子が力に餘る働き、痛所はなきかと慈愛の言辭、親猫が可愛ゆき子を舐ぶるが如し。

不審は晴れぬど、勝は云はれて痛む腕の節を揉み緩め、二度と顔面を拜むことは出来まじと思ひ絶えしに、憎つくき大罪水に流しての廣き御心に、常時の儘の有難き仰言聞くこそ、彌陀の來迎し給ふ心して、明日行かん冥途も踏み迷ひ申さじ。僅少の痛所はありとも、死なむ身體に何の觸りもなし。それよりも先づ心に苦しきは、暫時なりとも誑き申せし罪、許し難しと思召すは道理なれど、欲にはこの世にある中、許すと只一言御唇の外にと表露るゝを、別れては又と遇へぬその顔、惜しまず特と見せて呉れかし。
 其方が罪と云ふは罪ならず、戦國のこの世に權謀は度々あること、武士の妻なれば、誑しもすれば誑さるゝことにも慣れたり。此方には左程心に掛けぬど其方が濟まぬと思はば、長き月日互ひに馴れ染めし主従の厚儀に、邪が非でも聞いて貰ひたき頼みあり。聞かでは、明日無き命に相應しき限りは、

今際の御恩報じ、何なりと手を突く勝に、夫人後先を見廻し、頼みとは、日の出ぬ間を月に送られ、この城逃げて貰ひたし。えい。

今更驚くことかは、國は小さくとも主となれば、仁義五常に背きて民は治らず。道三まだ世を覗ふ干戈は鈍くとも、愚將ならねば聖人の道は明らめ給ふ。先刻に其方を我に預け給ひし殿の御心、二葉は何と解きしかは知らねど、如何に隔てなき夫婦の中とは云へ、城にも替へ難き大罪人、無残と女の手に預けらるゝ所謂はあるまじ。斬らんと思へば直にも斬るべきを、斬らで妾に渡し給ふば、抑も逃がせと云はぬは云ふに優男が胸なるべし。妾女の身として晴れの場に顔を晒らし、是非に預かりたしと云ひ出せしは、罕にもなき其方を助けて遣りたき爲めぞ。かく殿の御胸と妾が心と符合ば、其方は許すと云はで最早許されし身體、白晝間立流に城を出ても何か苦しからん。なれど然しては亦道三が弓矢に泥も付くなり。潔き其方に夜中密かに逃れよとは、勸むる唇の寒むけれど、齊藤の家名に花を持たせて、不肖ながら云ふ儘になりて欲し。

二葉如何にと密めきながら問へば、勿體なし、仇讐に酬ゆるも仁慈の過ぎ、勝が身は活きながら醜になる心地ぞする。數ならぬ女子を斯程まで思ひて賜はる御心、死しても忘るまじき故にお言辭には從ひ難し。殿夫人の仰せ給ふやうなるお心にてあれば事もなし、さもなきに早まりてわが身の逃げたる後、夫人のお身の如何になり行くやと覺束なし。勝が心の曲りかは知らねど、明日首になる今宵になりて、逃げよ立ち退けよとの仰言は、勝がこの世に未練ありて、死にかねるかと思召す如くにも聞ゆ。仇敵討ち果たす迄こそ命の大事なれ、遂げし今となりては有りても樂しからぬ命、思ふこと果しつればこの世に残る妄執もなく、却つてあの世の戀しく候。わが身夫婦はその名のみにて、片時も鴛鴦の双び住みしことなし、あはれ明日は殿の仰言通り命を召されて、一つ蓮の臺に二つの膝並べさせ給ふこそ、この上のお情けなれ、と後れ髪疊を舐めけり。

胸に突き掛け来る哀れを他所に、夫人膝へ兩手を直して、常時になく聲に針を持たせ、其方は思ひのほか夫に情の厚襖掛けて、人の恩には薄化粧も好ま

ぬ女子かな。と云はれて仰ぐ勝の顔を他所に外し、口には恩と云ひても、心は恩知らずと見えたり、さなくば一つを知りて二つには及ばぬ恩かものなるべし。逃げよと云ふは、殺すを惜しみての情けのみならず、殿の名を汚がすまじとの心なり。思うても見よ、齊藤道三が隠蔽ひしものを、女子に誑かり寄られて本意を遂げさせたるさへあるに、その下操の固き其方を殺したりと聞えては、殿は仁もなく義も知らぬ野猪武士と云はれ給はん、妻の身のなと此れが口惜やしからずや。されば何故に細解きて、放し鳥にせぬと思ふべけれど、館の掟の表面、人を殺せしものを無残とは許しがたかり。彼れと是れと世間の人の心を兼ねて夜中に逃げし、罪は妾が身の被りて殿に耻辱掻かせまじとする妾が心は酌みもせで、我意のみ云ひ張る其方は、可愛さも消えていと怨めしさを増さる。殿も此處に氣附け給ひて妾が身に預け給ひたれば、逃がしたりとてよも罪は問はれまじ。さるを然有らぬ時など、疑ふは、殿を恐かるのにする其方が言辭、重ねく、怨めしきぞ。と助命たき一心に、叱らでもよきに叱り、怨までもよきに故意と怨めしと云ひ給ふ深情、勝は何と答

ふる言葉もなく、突きたる両手の震ふほど、怨まるゝも叱らるゝも嬉し。夫人重ねて、二葉、これ程云ふに返辭せぬは、恩には酬ひぬと云ふ心か、殿に悪しき名を負すが本望か、恩に背き殿に耻辱掻かせても、世を替へて夫に遇ひたきかど壘み掛けられ、夫人が表裏の心酌みては、涙の外ぞなき。聞きつるか、鶏こそ鳴きたれ。妾が云ふことの解らぬ程の其方にもあるまじ、門の外には乗物の用意もあるなり、人顔見えては噂の端となりなん。疾くど手を持って引き起され、勝は力なく起ち上がれば、夫人後より押し給ひて、常時は供する身の供さする身に送られ、忍び足に部屋を抜けて廊下に出で椽へ廻るに、此處には先刻の老女、外出の用意して待ちけり。いざと密めく心に、草履を穿き、沓脱石を下りて身軀を願し、婦人の顔見上げて一世の別辭を述べんとすれば、手を持って早く。と教へ給ふに得こそ云はね、御無事にの一言に千千萬無量の禮心を籠めて言へば、只首肯き給ふ御顔、袖に隠し給ふ手焔の真直に照りて、臉毛の露に火彫の宿りぬ。復と遇ひ難き別れに、袂の振り切れず送巡ふを、夫人くるりと背を見せらる

に思ひ切りて、老女に手を取られながら二歩三歩行きつ、今一度と願視けば、入りもやらで其處にその儘の御姿、袖屏風の外に灯の散らで、嬉しや顔のありくど見ゆるなり。後髪引かれく歩行きて、早くも来る庭の門、これ越さば築塙にお姿の隠れて、この世の顔はこれ限り。と勝は老女の手を振り解き、願向きさま地の上に坐りて、また立ち給ふ夫人を遙かに拜めば、後ろに老女の咽ぶ聲す。

門の外には乗物に提灯點しかけたるが据りて、人は居ず。老女が蓋刎ぬるにつれて覗けば、是處にも慈愛の餘波を湛えぬ。市女笠、杖、草履、被衣、細帯と取り揃へたり。こも涙の種と指さして老女に見すれば、顔に袖を當て、曇る聲に、早くと云ふ。人の心無にせじと乗り移る扉はたと下りて、何處に隠れしか男二人、外に若き二人の腰元顯はれて、男は後先に肩を入るれば、女子三人は兩方の扉口を固みて、乗物遣れ。城の大木戸を守る武士、時世がら小手懸當したるが、刀に反りを打たせて聲高く誰ぞと問ふに、老女鞠籠傍を離れて、是れは夫人の仰言を蒙りて、氏神

へ朝参りする大奥のもの、開門頼み申と云へば、式ばかりの誰何とて深くは聞かず、小役人二人して外す一文字の門に、翳鳥の翼早や虚空は擴し。』
溜眼く土手の松、霞のひと刷毛に薄化粧して、城の白壁に行く雁の影を寫す頃、来る燕と共に人ある顔して売乗物は歸りぬ。落附かぬ姿を昨夕の儘に取れ何處までと問ひ給ふ、凡そ一里ほどと答ふるに太儀と仰せて、心地悪しきと觸れさせ、昨夜見ぬ夢見んとて臥床へ入り給ひけり。
程もあらず、道三より勝を受取りの使者。今朝氏神へ代参の人を出せしに、二葉その中に雜り入りしか、閉ぢ込めて置きし處に見えず。大事の預かり人逃がせし落度は今更申開く言葉もなし、御法通りのお尤め慎みて待ち申と云はすれば、道三それを聞いて何の言辭もなく、頷いて笑まれたり。

(其拾五)

昨日の夕暮は死ぬよと泣し鳥に今朝は喜ばれて、夢路を辿るとき勝は、魂を先の程歸し遣りし籠籠に残したるごとく、何處より何處を傳ひて來しか、現なき足に歩みたれば、今立つ處は何といふ道なるか、後脊を見れど城の影はなく、前は朝隈に包まれたる藁家の、番にも書かれぬが二軒ほど立ちたり。

畔路の真中に立て、左か右か、前か後か。と心は一つ道は四辻に思ひ亂れ、さながら命掛けて欲しきものをいろくど前へ並べられて、好女を取れど云はれたらん如し。斯のやうに迷ひたるときは、得て狐狸に遊ばるゝものと思へば心齊然と落附きて、我れながら鈍まし、足の踏み迷ふも道理かや、籠出た儘の放し鳥、我が行かん先はまだ極らぬにてありけり。

扱何處にせんものを。と手を重ねて載する杖を思案の柱にして、眼を閉づる前へ、田舎家の軒下より二人の武士瓢然と出で來つ、勝を中に圍んで左右に立ちぬ。扱は夫人の御仁慈、朝露と共に脆くも消えて、早や城より追手の人此處に待網の、我は再び籠の小鳥か。と悻然として一と足下るを、彼の武士

町噂に會釋して、二葉御かど問ふ、勝は否と云はんとする口を押へ、仇討まですしたる身が、誑かりて一時時を逃がれんとするは、初めありて終りのなき比法の舉動と思ひ直し、妾は勝なるが、其許達。はど笠に手を掛けて故意と我が顔面を拜ませ、動かぬ格期を見するに、彼の武士達は氣にも留めぬ素振りして、我等は齋藤譜代の武士なるが、夫人に頼まれ奉りて、和女の此處に來給ふを夜の中より待ちたり、先途見届けよとある御仰言承はれば、いざ落足の案内。と災害と思ひしは幸福と降り變る仁慈重くて、勝は思はず首垂るれば、下には春の恩恵に洩れぬ蘆の露に濡れたるが、同じやうに小首を傾けぬ。

ある時は縦に挿まれ、或るときは横に並び、倦きる野中へ來れば慰められ、人の往來あるときは離れて他處ながら誑られ、穿物の緒を踏み切るも手に土を附けず、笠の紐解けて落ちて腰さへ籠めぬまで心切にせられて、落人の身の護身刀の柄を握りしこともなく、腫の豆一つを旅の恙にて、徳には風も靡く小流を跨げば、三河の國岡崎の城下と書く、傍示杭の字をぞ讀みける。

城の天主を遙かに指さして、送り來し武士は互ひに顔見合せて勝を小蔭に招き、美濃より送り來ていざと云ふ間際に捨てしは、情に疎き人と思はるべく、我等も佛造りて魂魄入れぬ氣のするなり。あれ見給へ、あの天主は徳川殿の居城なり。徳川殿は戦國に又と有るまじき仁者なれば、敵國の武士なりと捕へて、無残と首は刎れられまじきも、互ひに腕を張る武士道の表面、間諜者と誤まられて細にても掛ければ、濃洲の武士三河の境に草鞋踏み込みて、捕へられたりと人の口留ましく、我が殿の耻辱この上もなし。また城中へ送り込みて、御身の無事に隠蔽はるゝやうに願むは容易けれど、款状も通せぬ敵の城へ入りて、仰言もなき私事の爲めに、我が殿へ奉りたるこの首は下げ難し。と嘆息して口を閉づるを、殘餘は今一人が引き取りて、さも氣の毒げに、三河は尾州と奥具の間なれば、この事の尾州へ白地になりたりとて、勝が身の上には及ぶまじ、その上ならず三河の殿は聞ゆる仁者なるに、罕にもなき女子と必ずや大切にせらるべし、これを除きては外に願むべき國なければ、三河へ送れよと夫人仰せられたり。さるによりて此處迄は送りたれど、

今此の仁の云ふ如く、頼めと仰せられねば、此の先如何とも詮方なし、女身の獨り放たれて心細きを知らぬにはあらねど、獨り放たねばならぬ譯は右の如し。これよりは一人して事を計り給へ、さりどて手藝なしと此處を離なるゝはよろしからず、如何にも計り謀りて、徳川殿に隠蔽はれ、夢夫人が斯く迄の御心、反古にせぬこそ望ましけれ
 歸らぬと知つて流るゝ水の御情、御情は御情と落ち嵩まりて、聞くたびに見らるたびに、今はしも限りなき大海となりぬ。と勝は杖を捨て、地の上に跪ぶき、涙のみ多くて言辭の少なきは、誠意の極まりと覺え給へ。夫人の御心確かに胸へ刻みて、其許等が注意も無にはせまじ、たとへ如何なる事のありとも、三河の境一と足も踏み出さじと云へば、それ聞けば最早用なし、一と時も早く歸りて、夫人の御胸を落ち附け参らせん、さらばと腰の物の緩みを直して、二人の武士は勝と蛤の二た身に別れ行きけり。
 今は呉竹の杖一もどを案内にして、城下を彼方此方と歩行き廻り、違ましけなる榎木を、太やかなる大黒柱の支へたる一軒の宿屋を見掛けて、此家こそ

と笠を脱ぐ勝を、亭主頭より足の爪先まで特と見て、店の端まで駆け出し、叱らでもよき下婢を叱りて、洗足の水忽に湯とぞ替りける。此方へと招ずるまゝに、勝は一段と飾り立てられたる奥坐敷へ通り、草臥たる腿を摩りて居れば、敷居越しに亭主罷り出で、よくこそそのお泊り、有り難く御禮申と稽首くを、此家へと招き、早速ながら其許に少と折入つて頼みあり、御城の武士の中に、懇ろにする方様を其許は持たぬかと問へば、私祖父の代より數十年この岡崎に住ひて、當時の殿竹千代君と仰せられし嚙昔より、淺からぬ御恩を蒙る家柄とて、随つて御城中にも知己の御武家多く持たり、と高からぬ小鼻を動かす。人懐かしき孤獨の身とて、勝は頼もしく思へば自然と言辭も低く、殿へ切に願ひ申したきことのありて、女子の身の只獨り、京より遙々と下りぬ。御仁慈悲深き殿、多分は妾が願望届くべしと思へど、直願は恐れ多し、誰人にもあれ其許が知りたる御武士の中より、意路悪るからぬ人を見立て、斯くの如き女子の、何か様子ありげなる願ひありと申すよし訴へて、その方様を連れ

て来て呉れかし、委細はその折りその人に遇うて話すべし。頼むといふはこのこといふを、二つの手に左右の膝頭を押へ、首を傾けて聞き居たる亭主は身を退つて平蜘蛛の如く、御無禮ながら、門へ立たせ給ひし時より、御禮外れ只ならず、京の由緒ある御生れとは、多年客商賣の馴れし眼に見て置き候。殿に御馴染の方様、御直願の筋の奥は、仰せられずとも容ばと頼に手を當て、へいへいと笑ひ、三河の御領主が、御愛妾の一人や二人。決してく氣遣はせ給ふな、日頃御恩を蒙りて疎からぬ間の、それはくお情け深き御仁をお連れ申し、容易と御城中へ御興入れさせ申すべし、野夫にも一と件の功と思召して、この後はよしなに。と己が勝手に考へて、打つ棍を外さぬつもりを推量。勝は少し呆れて答へぬを、左もこそと云ひ當てた顔して獨り喋り散らし、後下りに敷居越して、閉てる襖は優やかなれど、疊に騒ぐ足音は驅けてぞ行くならん。入れ替つてこの家の娘が、目入分に捧げて持ち来る折敷の菓子、これを縁にして、首尾よくお部屋さまと尊められしときは、手元に遣うて呉れと云ふ隠

語か、此方よりその方の心見え透くやうなり。續いて四十恰好の女、妻と名
 乗りて新らしき茶に花香を持たせ、計らず御宿を仰せ付けられてといふより
 初めて、京からの路筋の善悪、時がらとて戦争の咄、殿が功名の自慢など話
 して、長旅のお疲勞、御足など揉み申さん。と折角の愛想も諂諛に落ちんと
 するとき、亭主頼原の汗を拭きながら襖を開け、晩くなりて定めてお待久し
 うといふ後より、分別ありげなる一人の武士、大刀左手に提げてずいと座敷
 に通り、不思議さうに勝が顔を睨みて、客坐に腰を据へ、徳川家康が家臣大
 須賀五郎左衛門、初めて御意得申すと名乗る。
 勝は壘一枚ばかりを避けて下坐に退り、突く手の甲に反りを見せて、まだ御
 面影も晝の月影の其許に、各乗る初郭公の妾は、勝と呼ぶ氏もなき賤女。御
 閑暇もなき折から、勝手がましくも御足を願ませし譯は。と亭主の方に流盼
 して五郎左衛門の顔に眼を移し、少と密々に願ひ申したきことありてと辭儀
 するを、大須賀それと曉りて、功名顔に端坐まる亭主に向ひ、彼方へと鶴の
 一と聲、退れと臆の指圖。

勝と大須賀がさし向ひの密談、如何になりしかと亭主店に坐りて、撥きては
 崩す算盤の間隙の胸算用、二天作の五さらりと割るれば、折も折與の間に
 掌を打つ音す。見徳よし、と人を掻き退けて自身飛び出したるが、やがて小
 走りに駆けて来て、扱こそく我が推量通り、大事の御方、町家の人出入り
 繁き處には置き難し、乗物の用意せよ、兎も角も我が邸宅まで供する。と大
 須賀さまの仰言、これ噂、明日は御城から御呼び出しの御褒賞頂戴、え、永
 樂錢の顔は、何程見ても飽き足らぬ者ぞ。

(其拾六)

馬を鹿と見るものはなく、鏡に寫る影は一つなり。大須賀五郎左衛門も疎か
 ならぬ人と、城中なる我が宿所へ連れ歸り、暫時と勝を待たせて、衣服も替
 へず家康の御前に顔突き、斯くの如き女の斯くくの次第と言上すれば、家
 康脇息に肱を持たせて、身躰蕩くるばかりに感じ入り、智仁勇ともに兼ね備

へたる女かな。よし男にてもあれ、女にてもあれ、斯のやうなるもの一人、この亂れたる世に出でたるは、萬人が誠實の心を寫させん鏡なり。それ召せどあるに、毎時ながら淺からぬ君が御仁慈と、人事ならず直に走せ歸り、取つて返して勝を伴へば、尙精しく勝が口より聞かれて、三郎信康が夫人許り、自から勝を召し連れられて、倭國に二つとなき名玉、確かに預け參らす、大事に掛けて使ひ給へ。と心ありげに仰せて、その日より夥しき下賜物、濃州の眼は違はで、勝が身はあたら名器の綿に包まれ、服紗に蔽はれ、桐の二重箱へ入れられたらんごとし。

永祿七年、風來寺に合戦起りぬ、よも敵の奴輩の草鞋に、岡崎の城下は陥み荒らさせまじきも、萬が一此處に籠ることのありなば、婦女は死を決めし時の手足纏ひ、吾れ人共に心引かされて、又先鈍りては悔ゆるも甲斐なしと、城中の婦女は皆野田の城へぞ送らる。

氣丈の女とて勝は自から好みての殿り、一同に少し晩れて立退くと、家康計らずも見出し、大切の頼まれるもの、斯のやうなる混雜の際には、癖者近づか

んも知るべからず、無事に野田の城中へ入るゝまでは。と四邊を見廻し、御側に侍りたる大原右近左衛門、今村傳四郎を呼び掛けて、勝が守護を呉れ、も云ひ合め、勝には格別に乗物を賜はりけり。

我が身を思へば、朝顔の枯れなんどしては露の厚情に随ひ、添へ竹ならぬ有り合ふ雜木に纏ひ附きて、朝々を咲く果敢なきに似たり。兎に角に嬉しきは人の仁慈かな、濃州と云ひ三河と云ひ、毛筋一本の由縁なきものを、親族のやうに厚くせられて、乗つて見たことさへなき乗物に荷はれ、警固の武士まで附従らるゝは、諸侯の身に少しも變らで、怪しきまで僥倖の我が身なり。

京は名のみ草深に生れ、氏素性さへ無き身に、驚かれぬる運の好さ、前世は如何なる善根を施したらんなど思ひ浮べて、勝は乗り物の中に揺られながら、籠越しに外の面を見れば、此處は何といふ村端にやあらん、小高き真直の暖道にして、天蓋の如き赤松、土佐繪その儘に參差なる間より、対株の小紋置きたる田千枝、遠くに丁の蔭るさま、自から時候を見せて、弓伏せたる案山子鳴子繩に括られて、投げ出されたるぞ何となく憫れなる。

物思はぬ身にはあらねど、遂ひ景色に浮かされて、襦籠の戸近かに顔を寄せ、
 暫時莫忘想に恍惚となるとき、藤の間を渡る、空柱鳴き附けてか、松と松の
 間に掛け渡したる稲藪の蔭より、覆面に眼ばかり光らする武士らしきもの二
 人、袴の稜を内脛まで巻し上げたる毛鷹に跳り出で、襦籠先の男の鼻頭へ、
 物も言はず、突然に二尺八寸の稲妻。

愕然と打眼きして、狼藉といふ聲の下に襦籠ごと下ろせば、一と跨ぎに戸
 際に近づきて家根に手を掛け、白刃逆手に取り直すを、然はさせじと腰に擗
 らみて引き戻す襦籠の男。だどくとして踏み止まる武士は、舌打しながら
 腰を捻るに、襦籠の男はごろた石のごとく二三間轉びぬ。

今一人大手を擡げて、白刃の下に行かんとするを、残りの武士は左手に小腕
 取つて近か附かせず、是れにて邪魔は拂ひたり。以前の武士は土の上に片膝
 突いて、藤越しの両手突きに、あはれや勝は袋の鼠、暇の松が根に宿る露と
 消ゆるか。

たかい女一人に、武士らしくなき誑討の鈍刀、何どて勝が玉の肌血を染め

ん、突き込む刃に手答へなくて、襦籠の向ふ側にすつくと立つは、無事の勝
 なり。物言はぬ唇固く結んで、柳眉少しく逆立て、秋の五日月のやうなる眼
 に此方を睨みたる様は、女菩薩の來迎ましくたるやうに、兩頬の唇も、却
 つて威儀の助けとなりぬ。

初太刀の武士の仕損たりと見て、襦籠の男が小腕を力に任せて後ろに捨てつ、
 二の太刀は我と襦籠に乘し掛つて、嵩より片手打ちの奥兩つと振り蔽むれば、
 その腕抓むものあるに回顧る途端、逆に捻ねりたる柔術の奥の手に當てられ、
 見苦しくも覆面砂に雜れて、起きんとする脊に早や人の重味あり。

初太刀の武士是はと計り、血を見ぬ刀すごとくと引いて、立ち上る腰をはた
 と蹴られ、大突這ひに倒るゝを起しも立てず、はつと思ふ間に兩腕は脊へ曲
 げられて、脛くも下緒の細に、我が握り拳我が自由にならず。

大原氏、今村氏、危ふかりき。と互ひに袴の座叩くは、此者ならばと勝が身
 に附けられたる徳川昵近の強漢なり。勝は襦籠傍を外れて、二人の前に腰を
 屈め、危ふき十死の場合、女子の如何とも爲難く、狼籍の刃に睨も知らず眼

を閉づるところ、と二人の光庇に、再た一生を得申したりと謙退れば、左近
 左衛門、傳四郎の二人は片頬に笑むで禮を返し、大原が草鞋の緒緊むるを待
 つ間に用を足して、和御前に行き越され、晚れたり走せ附くればこの仕未
 なり。僅か力は用ゐたれど、さほどの功にもあらず。それよりは和御前の膽
 力盤石の如きに、癖者も手を附け果せぬと見えたり。何はしかれ、和御前の
 身体に過ちありては、殿の御眼鏡に外れたる面晴れ、敵と引き組むでさし違
 えん命を、この癖者の爲に棒にするところ。と引き据ゑたる覆面の脊中を憎
 さうに蹴附け、三人顔を見合せて恙なきを笑み合ひけり。
 これより二日ばかり過ぎて、見附宿の辻に、青竹三本組み合せて臺となした
 る上を見れば、彼の覆面の武士、鞍に分れて首のみとなり、亂れたる小鬘薄
 霜に濡れて、噛ひ緊る齒に風白く、開きたらばさぞや、閉ぢたる眼に往來の
 人を睨みて晒らされぬ。この頃の世の中、生首は知に轉がる西瓜ほどにも珍
 らしからぬと、新らしき板に墨の香消せぬ拾札、人の足をぞ留めける。
 銀肩にした男、一字も讀めぬに晒し首の髭分らねば、傍に立つ行脚の僧を見

掛けて、如何したる處刑と尋るに、旅僧繪木笠に手を掛けて、殊更に珠數を
 爪繰りつ、この二人の武士、城中の婦女が乗りたる駕籠へ、狼籍にも白刃を
 持ちて切り掛けられたれば、警護の者即坐に細を打つて、何故の仕末と問ひ直す
 に、尾州織田家の老臣佐久間玄蕃に頼まれ、乗物の中なる婦女を怨まむとし
 たるなりと云へど、織田家の名ある武士、佐久間玄蕃とも云はるものが、何
 とて此法にも忍者を放ちて、僅か婦女一人を仇にせんや、怨まむと思へば陽
 に怨むに、何の難き事やある、熱慮深考ふに、是は二人の盜賊、任損じて捕
 へられたる命惜しさに、有らぬ事を造り設け、鬼と云はるゝ人の名を借りて、
 細を抜けん企計なりと覺えぬ。重ねく許し難き奴なれば、首打ち落して辻
 に晒らすものなり。と云うて聞かすれば、村へ歸つて鐘子茶の馳走に、この
 談話圍爐裡の周圍を取り巻きぬ。

(其拾七)

隣國なれば他家の敵の防害もなく、驛路へ建札をして、織田信長の家臣池田紀伊守、徳川家への使者。と三河の國境より注進ありたれば、馬の蹄城門を入るは、今日の眞晝時ならん。とそれくの用意調へて待つに、果して思ふたるその頃、大手先に馬の嘶聲を殘して、供侍の聲高やかに、尾州織田家の使者池田紀伊守、只今到着。應と長く答へて、大木戸地鳴りしてぞ開かれける。

父子の間柄とて胸には白刃を研ぐ世なれば、互ひに表面に武を飾り、是れへと下賜されし御廐の逸物、悪びれもせず式臺にて乗り捨て、案内と立つ若侍の後背に附きて、池田紀伊守君命耻かしめぬ威儀泰然と、使者溜りに暫時待つに、折器の菓子に添へて、茶童が貴人點の薄茶一服式の如く、やがて城主直々の對面、と近侍らしき武士に迎へられぬ。

葵の定紋散したる二間の大襖を、二人してさつと開くを見れば、使者の間なるべし。上坐に當城の主徳川家康、太刀取の小堅後背に従へて、端然と坐りたる左右には、脇腹の臣と見ゆる猛士、事あらばと思ふ眼光鋭し。紀伊守程

宜き處に住ひて平伏せば、家康一と膝動き出で、遠路の使者太儀なり、尾州公にも變らせ給はぬか。との言辭難有しと受けて、公には何時もながら御健勝に渡らせられ、祝着に候と答ふれば、うむと頷きて家康莞爾くとしながら、使者の趣は。はつと紀伊守懐中を探りて、直筆の奉書、坐を進み来る近侍の手へと渡す。

家康推し擴げて兩手に翳し、暫時黙讀してくるくと巻に、紀伊守顔面を上げて、尾州仰せらるゝは、過る日見附宿に晒らし給ひし二箇の首級、尾張領の者と知らせ給ひたらば、一應は此方へ問合せ給ふこそ道理なるに、其事もなく自儘に烏木に掛けられ、そのみかは股脇の武士佐久間玄蕃の名さへ、汚らはしき捨札の表面に顯然と書かれたるは、何か御心ありての御舉動か、問うて參れとの使者斯くの通り。と紀伊守少し反り身になつて、返答如何にと何がふに、家康然り氣なく狀の売を手近の近侍に授づけ、紀伊、近う參れ。尾州公の仰言如何にも道理と聞ゆれ、されど今一應考ふれば、不思議の心起

らぬにもあらず。尾州に鬼ありと名を誣かし。織田家の柱石とも云はるゝ佐久間玄蕃が、可弱き女一人怨まんとして、忍の武士を頼むやうのこと有りとも覺えねば、頼むやうのことはよも有るまじ。必定是は盜賊の造り言にて、鬼に頼まれたりと云は、恐れて木の葉輩は許さんかと思つての嘘偽と看破りぬ。そののみならず當家は尾州と親族の間なれば、尾州者と云は、日頃の和親に命助からんか、と思案しての飾り言とも思はるべし。何にせよ婦女達を立返する中へ、物蔭より跳り出で、の狼藉、衣裳品物を覗き奪ん有様の見えたれば、盜賊に紛るゝ方もなし。國の鼠なればこそ首を刎ねて罪惡を晒らし、諸人の懲戒にしたるが、不思議は無き筈なり。

捨札の表面も亦右の如し、玄蕃に頼まれたると云ふは嘘言にて、紛るゝ方もなき盜賊なればこそ、見附宿に晒らすとは書きたれ。さらば玄蕃と書きたればとて、嘘言と有るに玄蕃の名は消えたる道理なるべし。此の如き譯は三歳兒にも分解るべきに、殊更に玄蕃の名を尤むるは、眞事玄蕃が忍の武士を遣ひたるやうに聞えて、なかなか可笑しからず、但しは玄蕃誠に然る事を企

てしや、よも左様のことには有るべくも思へず。

何日なりけん賜はりし使者は、玄蕃の弟なる七郎左衛門を討つて立退きし勝女を、請取らん旨趣なりけれども、其時云ふ如く、仇敵を討つは天の法なれど、又の仇敵を討つは古今未曾有にして、是れぞ天の法を破ると云はん、小身なれど徳川家康を見懸け、託むと立退き來りたる女、家康の眼珠黒き中は、如何な渡されまじと答へたりき。それもまだ消えぬに此度の事件、何に附けても玄蕃の名の出づるは、勇名隠れのなき證據とて、羨やましき限りなり。尾州公は宜き家來を持たれたり、斯程の者家康にも一人欲しき。

兎も角も亂世の中、盜賊の首刎ぬる如き小事には、使者などの面倒を捨て、互ひの處刑は勝手に仕たし。假令尾州にて捕へられたる盜賊、三河の者といふたりとて、遠慮なく首を刎ぬらるゝとも、晒らすとも仕給へ、家康少しも心外には思はじ。斯く云うたる言辭、若し道理ならずと聞かれて、尾州公怒り給は、其迄なり。弓矢の表面理は缺かれぬば、三郎が妻を潔よく還して、眞眞の縁の糸は丈夫の刀に斷然と切り捨て、甲州勢に後見させて、家康自か

ら先鋒と爲り、尾州へ馬の首を向くべし。
畢竟は玄蕃が叛反かんを恐れ給ひて、佐久間には斯くの如く厚くせらるれど、
家臣一人に替へて隣國の和好に薄きときは、多年上洛の御大望に、不思議の
災禍起るも知れず、と尾州公に傳へよ。家康の返答斯くの如し、誰そ在る、
織田殿の使者に響應の用意せよ。と笑の中に刃を隠し、眞綿に包む針に突か
れて、紀伊守再び返さん辭言も失せ、三汁五菜の響應の膳に座りたれど、心
此處にあらねば水を飲み砂を噛むごとき心地して、虎に遇ひたる野兎の、鏝
奴が馬引き寄するも速しや遅し、一鞭呉れて驀地、汗馬は白雨に遇ひたらん
やうに濡れたり。
尾州の心事計難し、二度まで使者を遣ひ還したれば、此度は安穩には濟むま
じ。と逃る紀伊守が跡を追うて出し遣りたる細作、二日目の眞夜中に走り歸
り、果して信長の怒り烈火の如く、尾州は馬に秣飼ひ、刀の寝た刃合すと告
げぬ。さらば先んせられぬ中に用意せよや。と城中の武士各自心構へに世話
しく、鐵砲の玉鑄るもあれば、小手脚當の破綻を驗ぶるもありて、敵の旗の

手先づ閃めくが否や、三郎殿が夫人を先づ送り出さんごまで驚しきを、表裏
を隔てたりとは云へ、如何でか勝女の耳に入らでやは。

(其拾八) (大團圓)

寄せ来る敵もなきに白刃を研ぎ、攻め行く敵も持たぬに鉄砲に玉を籠むるは、
抑も如何なる譯ありてぞ、油断は大敵といへど、餘りなる倉皇てかたなり。
と武者溜りの準備計らざる垣間見たる勝は、事あるごとに聞き流さぬ兎耳の
侍女を捕へて聞けば、確執の相手は我古主なる織田家と、仔細精しう話され
て會得しぬ。
知らざりき、知らざりき、何事も糸を手傳れば、原因は昔この身一つに集る
べし。思ひ出せば過ぎし年、夫入彌の殿、七郎左衛門が闇の白刃に掛り給ひ
て、朝も待たで露と消え給ひし時に、生甲斐もなく諸與にと思ひしが、我
身一人の外は別に親族も無きことして、無念の一太刀怨むものも有りど覺え

ねば、せめては可弱き腕ながら佐久間の身軀に傷なりと附けて、それを冥途の土産に再び面謁申さんと、惜しからぬ命をこの世に残すこと、仕たり。強ひて留めらるゝを強ひて願ひ、無理に眼を乞ひ申て館を出しが、近寄る術もなく、仇讎の住む所は知り、また眼前へ置きながら、一日二日と空に過し行く實情なき。それも神の救助か淺薄なる企計圖に當りて、首尾よく齋藤殿に奉公し、附けつ覗ひつする素知らぬ顔も曉られず、本望は三月十五日山の端出る朝日影に遂げたり。織田殿の館を出るときにも、七郎左衛門は強の仇敵、女の細腕などに闇々掛かるものに非ず、手傷負うたる野猪の舉動して、本望も得遂げぬあたら犬死は、愚痴しき極まりなれば、刃向はん時あらば密と人をして知らせよ、心得ある武士を貸さんと呉くも仰せたりしが、救援手有る仇讎討は武士の妻が面晴れならず、例之佐久間が刃に墮れて無念に無念は重さぬるとも、人の刃は借らずと思ひ定めぬ。されば身は脛に刻まれても、只一と太刀七郎左衛門が血を染むれば、凝結りたる無念は散らすべきに、數多の武士が面前に名乗りを上げて、強敵の命適れ貰ひ受けしは、我れなが

ら思ひも寄らず、夢に夢を見し心地、得職の上の望蜀の極端と云ふべし。最早この世に残る心とてはなく、只あの世に待たる、我夫に面謁申して、譽められたさが充滿なれば、縛り首になりても死ぬるが樂しみなりしに、切に云はるゝ齋藤の夫人が御仁慈、一時たりとも主人と頼みしからは捨て難く、重ねては尾州を出しとき、首尾よく仇讎討ち負せて、方に一つこの身の命あらば、再び歸り來りて夫婦が御恩贈りを一人にて荷ひ申さん。と約束申せし言葉を思ひ出だし、云はるゝ儘になりて美濃を出で、三河へこの身を忍びしは、惜しからぬ命捨て惜しみたるにはあらで、恩義に暫時命を預けたる迄なり。然るにそれが仇となりて、聞けば兩家の確執、盤石の下に置く曇卵の危急に迫りしとや、空吹く風とは開流し難し。一方は古主、一方は眼前の恩人、それが采配の下に衆多の人が血を流すを見ては、安穩として居らるべきか。罪なきものをこの身一つの爲に殺して、他所見が成るべきか。兩虎闘へば一虎は傷くべし、何方に傷きても恩を仇にて返すと同じく、自から刃は手に持たぬも、その罪は逃れ難くて、叫喚地獄の

責苦ぞ恐ろしき。殊更思ひ遣らるゝ哀慟は、いよく兩家の旗の手動くとならば、三郎殿が夫人も尾州へ送り返すとやら、離れぬ中の駕籠に隔ての柵となり、連理の生木を幹より裂く槽となるは、怨憤のこの身に被りて、如何憎しと思はるゝか知れず。この身夫に死別せし哀慟に比べて、これは生別の又一しほ、覺えあることゝて忍び得べしとは思へず。知らねばそれまで、知りて葛城の神となり、惜しからぬ世に罪を重ねるは淺猿しきことなり。玄蕃が弟を討たせたる怨憤は、我が身が夫を失ひしにてよく知りぬ。貰ひ受けたしどの使者來たりしも知れば、乗り物を松のむら立つ喉道、忍者が切つて掛りたる刃も、何の怨憤と云ふことも知りぬ。然程までに玄蕃が垂涎のこの命、投げ出して遣りたりとて大事なけれど、三河の殿に預けたれば今更自儘にもならず。この城抜け出して密つと尾州へ歸り、望むものゝ手に掛からば、兩家に研ぐ白刃も其儘に元の鞘なるべきも、左様とは知らぬ世の人の口の端に掛り、徳川殿こそ尾州に刃向ひ難く、見懸けて頼むと云はれし女を、密かに追ひ出したりなど噂せられては、折角の盡さん心も、曇らぬ武門に却

つて泥を塗る仕業となるべく、是れも亦恩を仇なり、斯くと知らば身は此處に預けまじものを。起てば頭を打たれ、坐れば膝を突かれ、居るにも居られぬ今の境遇、一つには兩家の確執を以前通りの和好となし、一つには駕籠の中に荒波も起さず、最終には我が身が四方八方に繋るゝ恩義仁慈の數々に酬ゆるは。と勝女は我が部屋に只一人、既往未來を考へ起し、雪を誑むく頸筋長く延して、眼を閉ぢ唇を結び、手は膝に重ね合せて死したる人の如くなりしが、暫時して莞爾と笑み、静かに四邊を見廻したる様は、常時に變りたることもなく、共に沈み掛りたる短檠の灯火を掻き立て、屹然と坐り直せば、時を報らす櫓の大鼓牙を渡りて、丑滿頃の夜を破りたる餘響は、腸に對へて膺寒氣なり。その夜は明けて次の朝なりけり、三郎の夫人の用を傳へんとて勝女が部屋へ走り行きたる侍女、怪たゝましき聲して事有り云ふに驚かされ、局頭何事ぞと障子越しに覗けば、哀れ昨日まで咲きほこりたる花は、知らぬ間にぞ散りける。

煙二枚を還して裏を出し、その上に蒲團を布きて、四端を内面へ折返したるは、鮮血を外へ流さぬ爲なり。立て廻したる屏風の金地に今日のみは飽の無くて、狩野が刷毛畫物淋しく、一筋も亂れぬ頭髪名香薫じて、膝緊めたる布帛の結び目固く、笑うて死に行きし證據は、身を殺したる正宗の短刀、血を拭うて鞘に納め有るにて知れぬ。
 俯伏す枕上に机一脚、殘んの烟香爐に咽びぬる傍に、只二通の遺書を供へて、尾州と管城の主に淺からぬ心を殘す。
 彼も是も涙に解けて、鞘走りたる白刃は血にも泣かず、織田徳川の間に撞壁なくなりて、和好は以前の如し。
 心しあらば訪ひぬかし、三河は岡崎の市街なる大樹寺に墓印一基、三百餘年の昔に埋もるれど、その名は朽ちぬ寒紅梅、今も年々の春に笑ふり。

こほれ萩 終

明治二十六年九月十六日印刷
同 年十月十七日發行

こほれ萩與付
定價金二十五錢

版 權 所 有



著 者 中 村 花 瘦
 東京市小石川區竹島町廿九番地
 發 行 者 和 田 篤 太 郎
 東京市日本橋區通四丁目五番地
 印 刷 者 根 岸 高 光
 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地
 發 行 所 春 陽 堂
 東京市日本橋區通四丁目五番地
 印 刷 所 秀 英 舍 工 場
 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
 電話五拾壹番
 (電話十九番)

正誤 本稿中齊藤道三の嫡子龍興とあるは龍龍の誤

切取

稟告

- 一 江州藩主様方信々御察察奉賞候様御次郎申上候處
御座は他の亦本藩林と目的を異にして世運風潮に先だ
ち文學社會に歸々たる大家方の手に成る新規新案の原
稿相違ひ製本に注意一逐次出版致候間愛顧諸君方御察
成御察候の程希望仕候
- 一 此買價目目外百銀の費は御命令に隨ひ御取次仕候
間御名者出版人等御賦御注文願上候尤も從來の亦
本は御目録にてよろしく直段は無油斷他店より一層
廉價に相續き候間自然高價にも差上候時は御申越次請
御明可申候
- 一 急金方は内國通運手違便又は銀行或は江戸橋驛便本局
宛等におはせに何れも御金に御願申上度候
- 一 御注文發着三日以内必ず出荷可仕候
- 一 此切取紙へ品物御送入御注文の御方へは該買價目目
内特別一割引にて御送り申上候
- 一 郵券代用は一割増にて取上候
- 一 宿所姓名は可成御明瞭に構世文字にて判然御願願上候
- 一 御親友御同僚中小説雜書御愛讀の御方の
宿所御姓名御通知願上度拙店より早速書
目御送り可申候
- 一 前件は下段及裏面に書入場所有之候間御
注意願上候

東京日本橋
通四丁目角 春陽堂 和田篤太郎

<p>名氏所住の君諸々らせ求購を類籍書</p>	<p>名氏所住主文注御</p>
<p> </p>	<p> </p>

卜部準平 大島孝造同著
○檢定済 應用 數學三千題 版三
上下洋裝美本實價四十錢宛郵稅八錢宛
右今般文部省檢定圖許に相成候間中學師範學校教科用書及教員參
考書として適當の者に御座候

○訂正 數學五千題 三冊
小學教科及教員參考用書 文部省檢定済 大島孝造著
上卷 正價廿二錢郵稅四錢 中卷 正價廿二錢郵稅四錢
下卷 正價廿二錢郵稅四錢
目次 ○命位加減乘除同種問題 ○諸等諸法 ○分數諸法同種問題
目次 ○小數諸法同種問題 ○四則應用問題
目次 ○正比例 ○正比例合問題 ○單利法 ○複利法 ○和比例平均算
目次 ○等比例 ○合率比例 ○連比例 ○積算 ○和比例
目次 ○累乘法 ○開立法 ○求積法
目次 ○開平法 ○重利法 ○複利法

○新 數學五千題解式 全
大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢

○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢
○大島著 珠算五千題 全三冊 郵三十五錢

○後 藤四 書 片假 價十錢
○村尾元 北海道新圖 實價廿五錢
○長著作 北海道新圖 實價廿五錢
○文部省檢定済 松島剛譯

○訂正 萬國史要 上合 價四廿錢
密書挿入 中合 價四廿錢
下合 價四廿錢
ウニョク氏著 久松定弘校閱 今井恒郎補譯

○哲 學 階 梯 全 郵十五錢
商業學校得業生堀口義三著
○業 簿 記 教 科 書 全 郵十五錢
○故 卷 眞 紳 千 字 文 全 郵十五錢
○明 治 算 法 新 書 全 郵十五錢
○改 合 級 教 授 術 全 郵十五錢
○石田幸 衣服裁縫獨案內 全二冊 郵八錢
○二 郎 著 櫻 州 先 生 著 岡 三 慶 校

○和 漢 記 事 論 說 軌 範 全 郵八錢
○對 照 震 世 文 體 明 辨 全 郵八錢
○廣 著 震 世 文 體 明 辨 全 郵八錢

伊藤桂洲書 岡三慶著
○明治活用文證大全 一冊 郵二十五錢
佛國ルソン一原著法學上原田潛譯

○民約論 覆義 一冊 郵二十五錢
勝海舟著 日清文明論 合卷 一冊 郵二十五錢
松島剛譯

○平田東助 合譯國家論 全 一冊 郵二十五錢
平澤定二譯

○中村千 著伊藤内閣史 一冊 郵二十五錢
太郎氏著

○日本六法全書 寸本 郵二十五錢
改正 徵兵令 寸本 郵二十五錢
官民 諸規則 罰令 寸本 郵二十五錢

○日本 民法 寸本 郵二十五錢
○日本 商法 寸本 郵二十五錢
○日本 刑法 寸本 郵二十五錢
○日本 訴訟法 寸本 郵二十五錢

○東京活用字典 寸本 郵二十五錢
○東京活用字典 寸本 郵二十五錢
○東京活用字典 寸本 郵二十五錢
○東京活用字典 寸本 郵二十五錢
○東京活用字典 寸本 郵二十五錢

美妙編纂
○新 節 用 辭 典 實價四十八錢 郵稅
附錄 ○無類七曜表 ○漢字假名遣 ○難字地名
○交通全圖 ○漢字假名遣 ○難字地名 ○日本海圖

○東京活用字典 和 本 郵七錢
○主人著 吾妻都々一風流花園全 郵七錢
○南李繼龍原撰 大久保櫻州解 郵七錢

○竹內編 繪入唐詩選 全二冊 郵八錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢

○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢

○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢

○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢

○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢
○新 體 詩 學 必 携 合 卷 郵七錢

渡邊者 美術世界

美術世界は木版彩色奉書極上等製本の美麗なる
繪畫雜誌なり第一巻より廿三巻迄追摺致取揃あり

美術畫

目次
第一號 長澤 國風畫
第二號 狩野 守法 元信 信隆
第三號 狩野 雪村 元信 信隆
第四號 狩野 雪村 元信 信隆
第五號 英 一 國風畫

川崎千虎 松尾四郎合著

美術名印部類 國風畫
此書は編者が多年苦心經營して本朝美術家の落款
印影を採集集したるものなれば其精確正確なる
こと固より首を待たず先第一著に於ては美術家
春日土佐住吉板谷等の系圖を掲げられたる巨勢
るもの及好古家たるもの必ず座右に欠くべからざ
る一大珍寶なり

尾形流印譜 實價二十五錢
尾形流百圖 實價六十五錢
浮世繪類考 實價六十五錢

入繪 歴史叢談

第一號 齋藤實盛 伊達政宗 那須與一 頼朝
第二號 堀川夜討 松平信綱 由良光氏 赤松
第三號 木下九郎 矢切但馬 長谷部信連 三浦
第四號 龍崎 龍崎 龍崎 龍崎 龍崎 龍崎 龍崎 龍崎

修身畫談

世間の修身者多しと雖も兒童の心に面白き者な
るは厭き易き少年の行を記したりては面白き者な
るに染み易き少年の行を記したりては面白き者な
るに染み易き少年の行を記したりては面白き者な
るに染み易き少年の行を記したりては面白き者な

是より小説

正直正 反古袋 實價四十五錢
高瀬文 若葉車 實價三十錢
南新著 文若葉車 實價三十錢
川上眉 小楠 實價四十五錢
山入著 荒海 實價四十五錢
史著外 鬼妻 實價四十五錢
浦浪六 三夫人 實價四十五錢
紅葉山 癡放言 實價四十五錢
櫻痴居 櫻痴放言 實價四十五錢
士著作 天竺德兵衛 實價四十五錢

小相

新花 夏瓜 實價四十五錢
尾山 夏瓜 實價四十五錢
葉庭 夏瓜 實價四十五錢
村山 夏瓜 實價四十五錢
紅葉山 夏瓜 實價四十五錢
人著 夏瓜 實價四十五錢
忍月 夏瓜 實價四十五錢
居山 夏瓜 實價四十五錢
人著 夏瓜 實價四十五錢
柳浪 夏瓜 實價四十五錢
紅葉山 夏瓜 實價四十五錢
山入著 夏瓜 實價四十五錢
史著外 夏瓜 實價四十五錢
浦浪六 夏瓜 實價四十五錢
紅葉山 夏瓜 實價四十五錢
櫻痴居 夏瓜 實價四十五錢
士著作 夏瓜 實價四十五錢

○一風著 小春の夕暮 全 七税二錢
 ○今日之東京 石版畫入 全 七税二錢
 ○源一著 尊號美談 全 七税二錢
 ○前田香著 新形時繪護謨櫛 全 十税六錢
 ○散人著 四月雲兩面鏡 全 十税四錢
 ○加藤芳著 椿の花相 全 十税六錢
 ○霧の屋著 大川物語 全 十税四錢
 ○原著 曼府の叛亂 全 十税六錢
 ○櫻洲著 新方萬金丹 全 十税四錢
 ○幸堂得知作 當世大風呂敷 合卷 八册 十税四錢
 ○雜口作 春のやま 全 九税二錢
 ○花火 淡路 島三册合 八税四錢
 ○網本著 幸福之種 全 五税二錢
 ○須藤著 小心中 全 六税四錢

○碩野著 裁判秋暮 嘆 全 二十税六錢
 ○依田百川補助 河尻實孝著 豐臣太閤裂封冊 全 十五税四錢
 ○防愚著 鬼車 全 五税二錢
 ○社化會 世界未來記 大本 全 二十五税
 ○進治之著 志士淑女の想海 全 十税八錢
 ○ニールスヘル著 井上勤譯 亞非利加内地空中旅行 全 十八税六錢
 ○三十五日間 空中旅行 全 十八税六錢
 ○ニールスヘル著 福田直彦譯 萬里北極旅行 全 三十五税
 ○末廣鏡 居士著 絕域北極 全 三十税
 ○小治治 前櫻 全 十七税
 ○居士著 國會開設の前後 全 二十税四錢
 ○依田百川著 破窓の風琴 全 十三税
 ○高田早苗著 山田長政の傳 全 十五税
 ○藤澤三樹著 日本未來 全 廿五税
 ○楠松著 小社會 全 廿五税

○西村芝著 近懐慨家列傳 實價八錢
 ○山居士著 古 實價四錢
 ○佐久間象山 渡邊華山 梅田雲漢
 ○藤田東湖 堀山彦九郎 浮田一
 ○吉野平 高田三樹 子平
 ○水野國臣 高田三樹 子平
 ○福原越後 高田三樹 子平
 ○坂本龍馬 高田三樹 子平
 ○安本武貞 高田三樹 子平
 ○岩倉具父子 高田三樹 子平

○三天四居 維新豪傑談 實價卅六錢
 ○飯田宇宙君著 故小室信介先生遺稿 實價卅四錢
 ○與亞綺談 夢戀々 全 實價卅四錢
 ○訂正 太平記 實價五十七錢 郵稅十六錢

○南新著 遊池の水禽 全 八税四錢
 ○小宮山即 しらぬ火 全 八税二錢
 ○眞居士著 どりかへはや 全 八税四錢
 ○探人新著 水と 全 八税四錢
 ○香人新著 喜と 全 八税四錢
 ○山入新著 遊と 全 八税四錢
 ○人味著 怪物屋敷 全 八税四錢
 ○道人著 遊と 全 八税四錢
 ○香人著 拾遺後日連枝楠 全 八税四錢
 ○依田學著 苦茶 全 八税四錢
 ○海居士著 破柳 全 八税四錢
 ○櫻村著 風流願 全 八税四錢
 ○居士著 八重櫻里の夕暮 全 八税四錢
 ○東條著 戀の妻折 全 八税四錢
 ○竹中著 戀の妻折 全 八税四錢
 ○錦城著 戀の妻折 全 八税四錢

橋爪譯 男女交合新論

全 金十錢 郵稅四錢

心得●五三册紙に付て○目次●總説●空氣●飲食●衣服●住家●婚姻●交媾●妊娠●小兒期●幼年●原因及注意●傳染入病の原因及預防法●虎列刺●鷹堂扶斯●赤痢●實扶的里亞●痘瘡●梅毒●疥癬●人間福利の階級●資質の區別●發力の強弱(完)

●目錄●第一交媾は最も貴重すべし●第二愛情は情人と交結せんと望みに出●第三交媾は男女の構造愛情及び婚姻の精神たり●第四交媾の適否に依て利害苦樂を異にする●第五交媾の目的及び其方法●第六兩親の形狀性質等は其兒に遺傳す●第七父母たるべき者は未生兒の爲に其才徳行狀を修養すべし●第八精神の愛は設生に必要なり●第九精神の愛を以て爲す交媾は淫慾の爲に爲す交媾より多し●第十精神の愛は淫慾を壓し●第十一愛情と生殖器とは淫慾は精神の愛を壓す●第十二愛情と生殖器とは相感應す●第十三愛戀する人には陰具勃張し厭忌する人には陰具萎縮す●第十四愛情と交媾とは必ず相伴ふ●第十五愛情ありてこそ交媾するは本通を重ねるあり●第十六交媾は設生に必要なり●第十七交媾には男女とも盛に情慾を發動すべし

●第十七情慾は女子にありて最も緊要あり●第十八女子は男子をして情慾を發動せしめ生殖の功を遂る義務を負ふ●第十九交媾の時女子淫情を生ぜざれば男女とも其害を受く●第二十男女淫情を交換せざれば激怒を生ず●第二十一多淫の夫に忠告の言●第二十二女子の情慾少き理由及び是を發生せしむる方法●第二十三孕胎の後交媾すべからず●第二十四新婚の夫妻に忠告の言●第二十五父母の望に隨て男兒或は女兒を生じ得べき法●附雙生子の説●第二十六設生に可なる日時を論ず●第二十七交媾に付ての注意●第二十八交媾は全身の作用を促勵す●第二十九精神の噴激と羞恥とは設生に害あり●第三十情慾を節抑するは害ありざる説●第三十一亂雜の交媾は爲すべからず●第三十二妾を蓄ふる害を論ず●第三十三避孕は天理に背く事●第三十四舌精を扣へる害を論ず●第三十五精神の愛は避孕の良法なる事●第三十六子なき原因及び其治法を論ず●第三十七陰部解剖の學を世に普及する事の必要なる説●第三十八精蟲の説●第三十九九率丸の構造及び其効用●第四十陰莖の構造及び其効用●第四十一尿道と攝護腺との構造及び其効用●第四十二龜頭と包皮との構造及び其効用●第四十三子宮の構造及び其効用●第四十四陰道の構造及び其効用●第四十五卵巣の構造及び其効用●第四十六男女の陰具は互に能く適合す●第四十七陰具の摩擦は全身の作用を起す●第四十八壓力は交媾に必要なり●第四十九孕胎の説

